３月予報（全１３枚）

病防第６１号
令和５年（２０２３年）３月１日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和４年度（２０２２年度）発生予報第１２号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和４年度（２０２２年度）病害虫発生予報第１２号（３月予報）

Ⅰ　気象予報：令和５年（２０２３年）２月２４日福岡管区気象台発表
◎向こう１ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要　　素	低　い （少ない）	平年並	高　い （多い）
九州北部全域 （含、山口県）	気　　温	２０	３０	**５０**
	降 水 量	**５０**	３０	２０
	日照時間	２０	３０	**５０**

Ⅱ　【今後、注意すべき病害虫】
１　発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	カンザワハダニ	やや多	やや少	並（±）	―	気温高（＋） 降水少（＋）	
カンキツ	かいよう病	並	並	やや多（＋）	やや多～ やや少（±）	降水少（－）	
	ミカンハダニ	やや多	やや多	並（±）	並～少（±）	気温高（＋） 降水少（＋）	
冬春 トマト	葉かび病	少	並	少（－）	並（±）	降水少（－）	

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。
「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	すすかび病	並	並	やや少(－)	並～やや少 (±)	降水少(－)	
	黄化葉巻病	並	少	黄化葉巻病 並(±) コナジラミ 並(±)	黄化葉巻病 並(±) コナジラミ 並(±)	(コナジラミ) 気温高(＋)	
冬春 ナス	すすかび病	やや少	やや少	少(－)	並～やや少 (±)	降水少 (－)	
冬春 キュウリ	うどんこ病	並	並	やや少(－)	並(±)	降水少(＋)	
	べと病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(－)	
ウリ科 野菜	キュウリ・メロン 退緑黄化病 スイカ退緑えそ 病	並	並	キュウリ 退緑黄化病 やや少(－) コナジラミ やや少(－)	キュウリ、 メロン、スイカ 並 (±)	(コナジラミ) 気温高(＋)	
イチゴ	ハダニ類	やや多	並	並(±)	多～並(＋)	気温高(＋)	
	アザミウマ類	やや多	やや少	並(±)	やや多～並 (±)	気温高(＋)	
冬春 果菜類	灰色かび病	やや多	やや多	トマトやや少 ナス　多 イチゴ　並 キュウリ多 (＋)	トマト　並 イチゴ 並～やや少 ナス やや多～並 キュウリ やや多 (＋)	降水少(－)	

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 果菜類	コナジラミ類	並	並	トマト、ナス 並 キュウリ やや少 (±)	トマト、ナス、メロン、キュウリ、スイカ 並 (±)	気温高(＋)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	ナス、キュウリ 並 (±)	ナス 並～やや少 キュウリ やや多 (±)	気温高(＋)	
	アブラムシ類	やや多	やや多	トマト、ナス キュウリ 並 イチゴ やや多 (±)	トマト、ナス メロン　並 キュウリ やや多 スイカ、イチゴ やや多～並 (±)	気温高(＋)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(＋)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

２　予想発生量、根拠、対策等

◎茶

１）カンザワハダニ

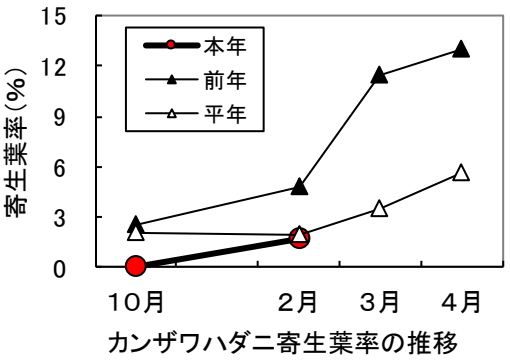
（１）発生量：やや多

（２）根拠　ア　２月の巡回調査では寄生葉率 1.8%（平年 2.0%）と平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　３　防除のポイント「**茶のカンザワハダニの発生に注意しましょう**」を参考に対策を行う。

イ　防除にあたっては、薬剤が葉裏まで届くよう規定の散布量で丁寧に散布する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



カンザワハダニ寄生葉率の推移

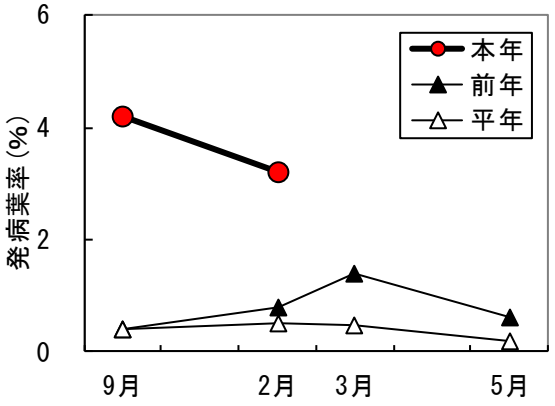
◎カンキツ

1）かいよう病

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　２月の巡回調査では一部ほ場で多発生が確認され、発病葉率3.2%（平年0.5%）と、平年比やや多の発生であった（＋）。

（3）対策　ア　伝染源は、前年に葉や枝に形成され越冬した病斑である。伝染源が多い場合は、その後の発生も多くなるので、発病した葉や枝の剪除を徹底する（３防除のポイント等の「**果樹類の春先の病害虫防除について**」を参照）。



かいよう病発病葉率の推移

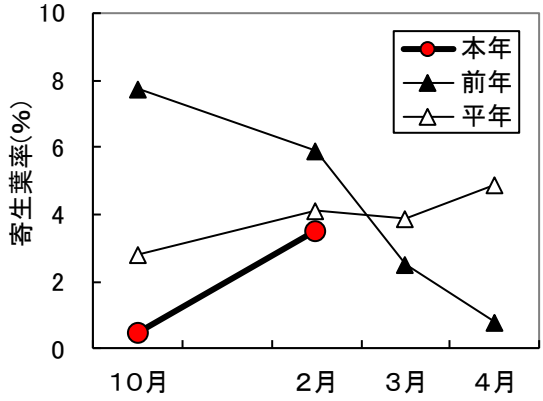
イ　春先の発病が多い場合には、果実への感染も多くなるので、発芽期の防除適期を逃さないよう注意する。

2）ミカンハダニ

（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　２月の巡回調査では、寄生葉率3.5%（平年4.1%）、寄生頭数0.6頭／10葉（1.1頭／10葉）と平年並の発生であった（±）。

（3）対策　ア　ミカンハダニの寄生密度が上昇し、多発すると防除が困難になるため、発芽前にマシン油乳剤を散布し、初期密度を下げる。ただし、樹勢の弱い園ではマシン油乳剤の散布を控える。



ミカンハダニの寄生葉率の推移

イ　越冬期にマシン油乳剤を散布しなかったほ場では、ミカンハダニの発生に注意し、４月以降の薬剤防除を徹底する。

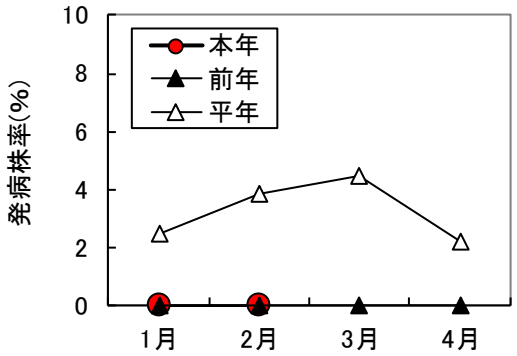
◎冬春トマト

1）葉かび病

（1）発生量：少

（2）根拠　ア　２月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年3.8%）、平年比少の発生であった（－）。

（3）対策　ア　抵抗性品種であっても発病に注意し、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。



葉かび病の発病株率の推移
（冬春トマト）

イ　発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

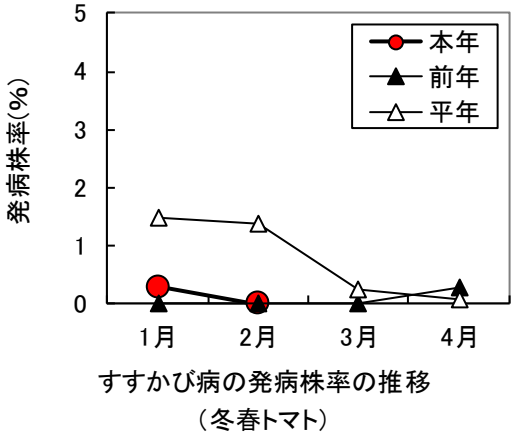
ウ　過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

２）すすかび病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年1.4%）、平年比やや少の発生であった（－）。



すすかび病の発病株率の推移
（冬春トマト）

（３）対策　ア　発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ　発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ　過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

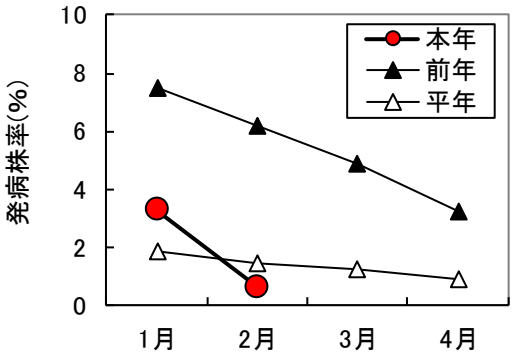
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

３）黄化葉巻病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、発病株率0.6%（平年1.4%）と平年並の発生であった（±）。

イ　２月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.3%）、平年並の発生であった（±）。



黄化葉巻病の発病株率の推移
（冬春トマト）

（３）対策　ア　タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策及び保毒虫を施設外に「出さない」対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ　施設内外の雑草はタバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ　黄色粘着板トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。
「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

◎冬春ナス

１）すすかび病

（１）発生量：やや少

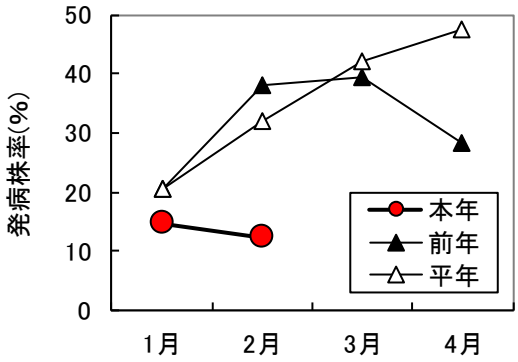
（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、発病株率12.4%（平年32.1%）と、平年比少の発生であった（－）。

（３）対策　ア　発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ　発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ　過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すすかび病の発病株率の推移
（冬春ナス）

◎冬春キュウリ

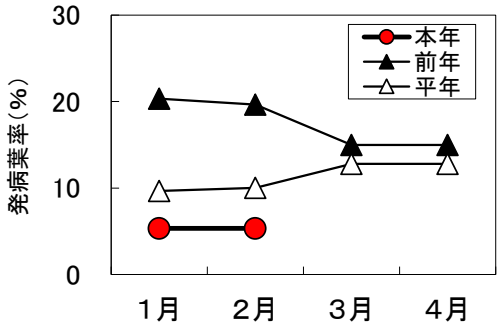
１）うどんこ病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、発病株率5.3%（平年11.1%）と平年比やや少の発生であった（－）。

（３）対策　ア　多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病葉率の推移
（冬春キュウリ）

２）べと病

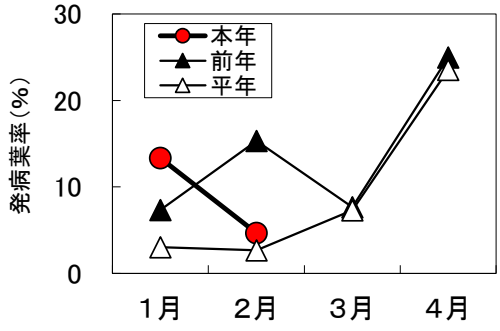
（１）発生量：並

（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、発病株率4.7%（平年4.9%）と平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け肥培管理に注意する。

イ　多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



べと病の発病葉率の推移
（冬春キュウリ）

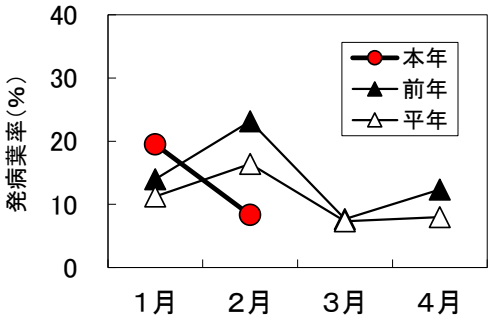
◎ウリ科野菜

1）キュウリ・メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　２月の巡回調査では、キュウリで発病株率8.3%（平年16.4%）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ　２月の巡回調査では、キュウリでタバココナジラミの寄生葉率0.7%（平年4.1%）と平年比やや少の発生であった（－）。



退緑黄化病の発病株率の推移
（冬春キュウリ）

（3）対策　ア　保毒虫を施設内で「増やさない」対策および施設外に「出さない」対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

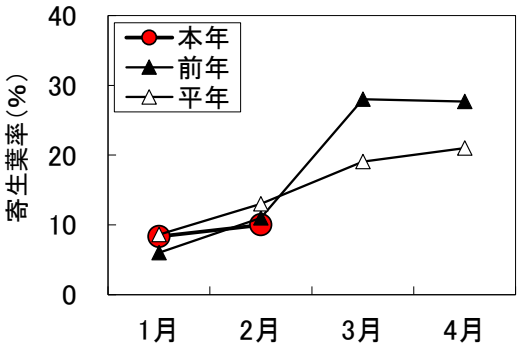
◎イチゴ

1）ハダニ類

（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　２月の巡回調査では、寄生葉率10.0%（平年13.0%）と平年並の発生であった（±）。

（3）対策　ア　現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇すると、急激に増加するため、発生初期に防除を徹底する（３　防除のポイント等の「**イチゴにおけるハダニ類の防除対策**」を参照）。



ハダニ類の寄生葉率の推移
（イチゴ本ぽ）

イ　寄生葉を早めに取り除き、ほ場外に処分する。

ウ　薬剤防除の際、事前に下葉かぎを行い、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ　天敵（カブリダニ類）を放飼したほ場でハダニ類が発生している場合は、天敵に影響の少ない薬剤の散布や天敵の追加放飼を行う。なお、それでも発生が多いほ場では、効果の高い殺ダニ剤を使用した上で、薬剤を主体とした防除体系に切り替える。

２）アザミウマ類

（１）発生量：やや多

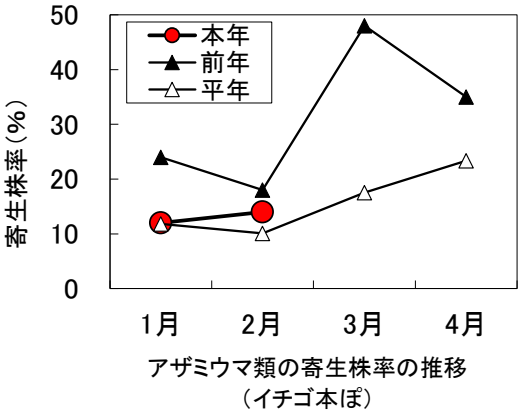
（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、寄生株率14.0％（平年10.1％）と平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　これからの時期は、施設内での発生が増加するので、花を注意深く観察することで早期に発見し、発生初期からの防除を徹底する。

イ　施設内外の雑草は、重要な発生源となるので除草を徹底する。

ウ　薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生株率の推移
（イチゴ本ぽ）

◎冬春果菜類

１）灰色かび病

（１）発生量：やや多

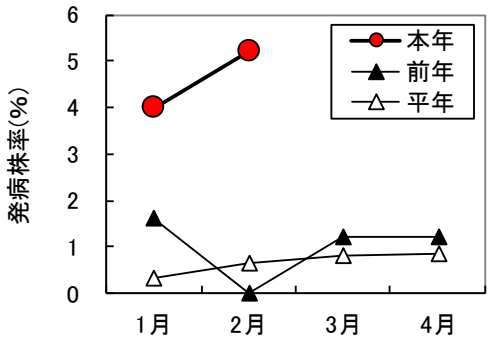
（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、トマトで発病葉率2.0％（平年6.3％）と平年比やや少、ナスで発病株率5.2％（平年0.6％）と平年比多、イチゴでは発病株は確認されず（発病株率(葉)平年0.2%）平年並、キュウリで発病株率4.7％（平年0.3%）と平年比多の発生であった（＋）。

（３）対策　ア　発病果、発病葉、花弁は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

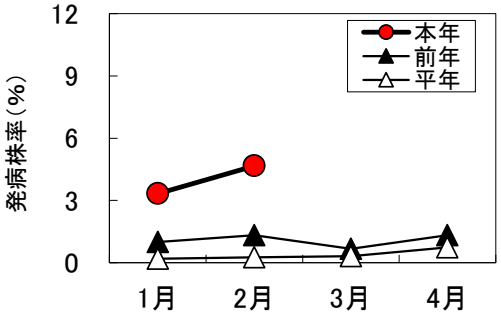
イ　過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ　防除の詳細については、令和５年２月27日付け発生予察技術情報第13号も参考にする（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/131482.html）。



灰色かび病の発病株率の推移
（冬春ナス）



灰色かび病の発病株率の推移
（冬春キュウリ）

2）コナジラミ類

（1）発生量：並

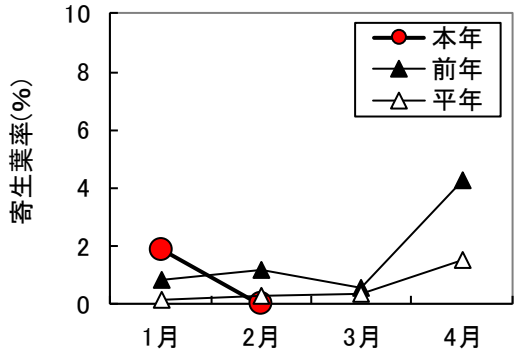
（2）根拠　ア　２月の巡回調査では、トマトで寄生葉が確認されず（寄生葉率平年0.3%）平年並、ナスで寄生葉率5.6%（平年6.4%）と平年並、キュウリで寄生葉率0.7%（平年4.1%）と平年比やや少の発生であった（±）。

（3）対策　ア　タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

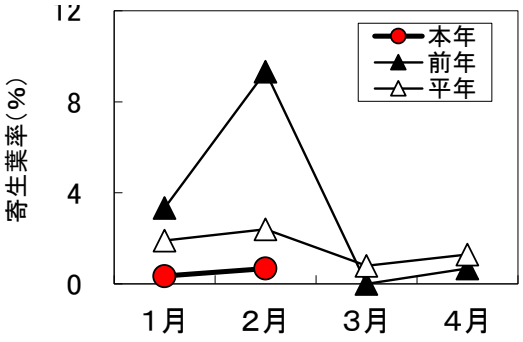
イ　施設内外の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ　黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（冬春トマト）



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（冬春キュウリ）

3）アザミウマ類（イチゴ除く）

（1）発生量：並

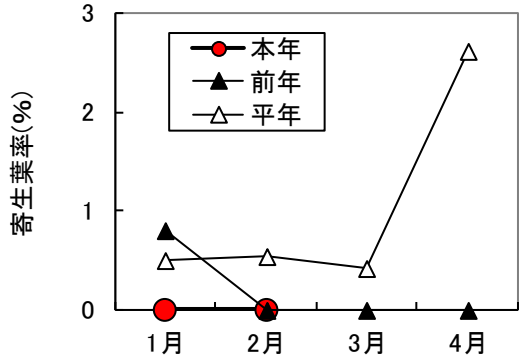
（2）根拠　ア　２月の巡回調査では、ナスで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.5%）平年並、キュウリで寄生葉率0.3%（平年1.1%）と平年並の発生であった（±）。

（3）対策　ア　これからの時期は、施設内での発生が増加するので、粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、早期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

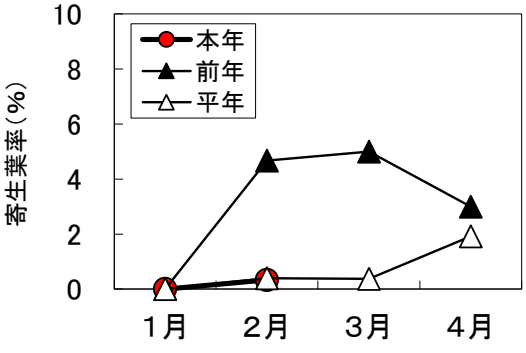
イ　ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

ウ　施設内外の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移
（冬春ナス）



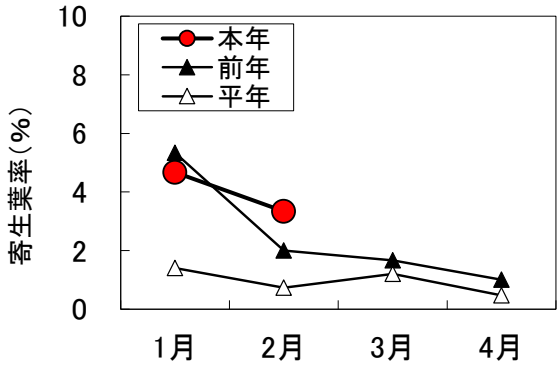
アザミウマ類の寄生葉率の推移
（冬春キュウリ）

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。
「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

４）アブラムシ類

（１）発生量：やや多

（２）根拠　ア　２月の巡回調査では、トマト、ナスで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年 トマト0.0% ナス0.0%）平年並、キュウリで寄生葉は確認されず（平年0.0%）平年並、イチゴで寄生葉率3.3%（平年0.7%）と平年比やや多の発生であった（±）。



アブラムシの寄生葉率の推移
（イチゴ本ぽ）

（３）対策　ア　気温の上昇に伴い、有翅虫の飛来が多くなるため、施設開口部等への防虫ネット展張によりほ場内への侵入を防ぐ。

イ　吸汁によってウイルスを媒介するため、発生に注意し、発生初期の防除を徹底する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

３　防除のポイント等

茶のカンザワハダニの発生に注意しましょう

カンザワハダニは、平均気温が７～８℃以上になると産卵を開始し、10℃を超えると産卵が活発になります。

防除適期は平均気温が10℃以上になる３月中旬から下旬頃となりますが、気象予報によると３月の気温は平年より高い予想であるため、例年より早くカンザワハダニの活動が活発になり、防除適期が早まることが懸念されます。

一番茶萌芽前の防除の良否が年間の発生量を左右しますので、経済許容水準（寄生葉率20%以下）を参考として、茶園での発生状況をよく観察し、適期に防除を行いましょう。

果樹類の春先の病害虫防除について

＜カンキツ＞

1　ミカンハダニは、発芽前のマシン油乳剤散布により初期密度を抑制しましょう。散布の際は、樹全体にムラなくかかるようしっかり丁寧に散布しましょう。なお、マシン油乳剤は樹勢の弱い樹に悪影響を及ぼす場合や発芽後の高濃度散布で薬害が生じる場合がありますので、樹勢や使用時期・使用方法に注意して使用しましょう。

2　カイガラムシ類の発生が多い園ではマシン油乳剤の散布により、越冬世代の防除を行いましょう。樹勢の低下などの要因からマシン油乳剤を散布できない場合は、アプロード水和剤にアビオンEを混用して散布を行いましょう。（農業の新しい技術No.737「ウンシュウミカンのナシマルカイガラムシはマシン油乳剤以外による越冬期防除が可能である」参照）

3　かいよう病は、前年に発病した旧葉や枝が初期感染源となり、３月中旬以降の降雨により、葉の病斑から菌が流れだし、感染が始まります。薬剤による防除は、発芽前の防除が特に重要であり、発芽前～５月の予防を徹底しましょう。

4　そうか病は、旧葉の病斑が伝染源となるため、昨年発生が多かった園では特に注意が必要です。薬剤防除では、初期の予防が重要であるため、幼芽期（新芽が５㎜以内）の防除適期を逃さないよう注意しましょう。

＜ナシ＞

黒星病は、展葉直後から感染し始め、発病するまでの潜伏期間が14日以上あります。感染に気付かず薬剤防除が遅れると多発するため、予防散布を徹底しましょう。特に、３月中下旬の萌芽初期、３月下旬から４月上旬の開花期は、最も重要な防除時期となるため、薬剤を散布するタイミングを逃さないよう注意しましょう。

イチゴにおけるハダニ類の防除対策

現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇するにつれて多発生する恐れがあります。特に、３月以降は収穫盛期となり防除が遅れがちになるため、早めの防除を徹底しましょう。

（１）薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉はポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。

（２）薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。

（３）使用できる殺ダニ剤が少ない場合は気門封鎖剤などの物理的防除薬剤を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、７日程度の間隔で複数回散布する。

（４）未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。なお、親株ほ（育苗ほ）の管理作業は、ハダニ類を持ち込まないために最初に行う。

（５）カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用しハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。

（６）薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないよう使用する。農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守して農薬の安全使用に努める。

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になるため、今後、ウイルスを持った虫（保毒虫）が施設外に拡散することによってウイルス病の発生が増加することが懸念されます。

そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の２つの対策を必ず行いましょう。

１　保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

（１）施設内に粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。また、コナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う

（２）ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。

（３）発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。

（４）ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

２　保毒虫を施設外に「出さない」対策

地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、施設内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

（１）定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無いか点検し、必要に応じて修繕を行う。

（２）成虫に効果の高い薬剤を主体とした薬剤防除を行う。

（３）微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。

（４）悪天候などで作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。

（５）地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。

（６）施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

Ⅲ　【その他の病害虫】

作　物	病 害 虫 名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
冬春 トマト	疫病	並	巡回調査では、発病株は確認されず平年並(±)。 防除員報告は、平年比やや多～少(±)。 発病後は防除が困難なので、予防に重点をおく。 前年に発生が多かったほ場では、定期的に薬剤散布を行う。
ウリ科 野菜	つる枯病	並	防除員報告は、メロン、スイカで平年並(±)。 株元周辺をできるだけ乾燥状態に保つ。 窒素質肥料の多用を避け、適正な肥培管理を行う。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			

Ⅳ　その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎　詳しい内容等については　病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL：096-248-6490) にお問い合わせ下さい。
※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」上に掲載しています。